月曜評論

田中首相を送る

中嶋嶺雄

田中首相は、きょう、訪中の途につく。新内閣発足以来、わずか三カ月にして、戦後日本外交の最大の課題の一つである日中国交正常化交渉に臨むこととなり、いよいよその旅路についた田中首相の抱負と決意に照らして、国民は等しく大きな期待を寄せ、同時に交渉の前途を注視している。私としても、「一路平安」を祈るとともに、交渉が真に実りある果実を結ぶことを期待してやまない。

◇……◇

思えば、今日を迎えるまで、日中関係の過去は、長く重い歴史の道程のなかで傷つき、屈折しながら、きわめて困難な歩みをたどってきた。もとより、それらの困難が今回の首相訪中によって一挙に解決されると思うのは、あまりにも単純な見方である。むしろ、日中関係は、いま、ようやくその本格的なシーンの展開を見つつあるのであり、この意味では、ようやく「はじまり」に達したと見るべきであろう。そして、日中関係をめぐる諸懸案や諸問題についての論議や方策についても、すべてが十分につくされたわけではない。だが同時に、論議や方策については、そのほとんどが出つくした観があることも事実であり、現時点では、中国側と誠心誠意まっこうからぶつかりあってみる以外にないことも明らかである。だから、ある場合には、徹底的に対立してもよい、相手の主張をまともに受けとめつつ、わが方の意見も忌憚（きたん）なく出しあって交渉に当たることが必要であろう。それは、まず第一に、中国人は、そのパーソナリティーからしても、卑屈さをよそおった慇懃の挨拶（はいき）をこそ信用しないからであり、第二には、日中関係の将来に予想される様々な困難を考えたとき、この機会にこそ、すべての問題点を出しあって話しあうことが必要だと思われるからである。多くの国民も、この点で、首相が率直かつ正々堂々と交渉してきてくれることを期待しているにちがいない。

◇……◇

しかも、今日の日中正常化交渉は、その帰結いかんが、あまりにも大きな国際的波紋と影響力をもつであろうことが目に見えている。この点で、日中交渉は、日中両国間の二国間の次元で見れば、たしかに戦後処理の懸案であるが、これを国際的に見れば、決して戦後処理外交ではなく、アジアの経済大国・日本が、政治大国・中国と手を結ぶことだと受けとられつつあることを忘れてはならない。私は、この九月五日から二十一日まで、日中接近下のアジアの現実をたしかめるために、東南アジア七カ国をあわただしくかけめぐってきたばかりであるが、アジア諸国の中国像とその視座は、今日のわが国におけるものとはあまりにも大きく異なっていた。それは、東南アジア各国が、それぞれの陰影に濃淡があろうとも、しのびよる「中国の影」に必死に格闘しているからであるが、これら諸国にとって「中国の影」は、たんに国際政治上の「影」だけではなく、あの厖大（ぼうだい）な数の東南アジア中国人（華僑）の存在や毛沢東革命の内在的脅威がもたらす、まさに内側からしのびよる「中国の影」として存在している。のである。しかも、これら諸国は、それぞれの事情と経緯から、いずれも中国と国交をもっていない（あるいはインドネシアのように断絶状態にある）。それだけに、日本がどのようなかたちの日中交渉を展開するのか、これら諸国は、期待と不安と、そしていくばくかのいら立ちのなかで、かたずをのんでその前途を見守っている。私は、そのように苦悩しているアジアを忘れてはならない、とつくづく痛感したが、それは、これら諸国にとって、いまや日本の存在は、決定的な意味をもってビルト・インされているからでもあり、日本はこの点でも大きな責任をもたねばならない位置に立ってしまっているからである。

◇……◇

このように考えたとき、日中交渉は、たんなるセレモニーや華麗な宴（うたげ）であってはいけないはずであり、まして日台関係の諸現実と台湾の民衆のことを考えたとき、今回の日中交渉によって帰結されゆくであろう問題が、重々しい報道合戦のなかで、また新しい報道合戦のなかに解消されてしまっていいはずはない。まさに、重く深い感懐と冷かな容認をして勇気ある対応のなかでこそ、日中交渉はすすめられなければならない。

私のささやかな訪中体験からしても、あの悠久（ゆうきゅう）の歴史と広大な風土、そして熱烈な歓迎のなかにひとたび身をさらしたとき、われわれ日本人は、きわめて情緒的でエモーショナルな独特の感情にすっかりとらわれてしまう。とかく理性的な対応と論理的な交渉の余地が、前提的に狭まってしまうようなふんい気がそこにはある。だが、田中首相は、この点についても、あくまで自覚的であってほしいと思う。なぜなら、日中関係の長期的な安定と友好の方向は、そのような感情を糾弾するなかでこそ見出されるものだと私には思われるからである。

（東外大助教授）